



TITLE:

クビライ政権の成立とスベエテイ家

AUTHOR(S):

堤, 一昭

CITATION:

堤, 一昭. クビライ政権の成立とスベエテイ家. 東洋史研究 1989, 48(1): 120-147

ISSUE DATE:

1989-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154264>

RIGHT:

クビライ政權の成立とスベエテイ家

堤 一 昭

はじめに

- 一 モンケとウリヤンカダイ
 - 二 クビライの雲南遠征とウリヤンカダイ
 - 三 クビライ政權の成立とウリヤンカダイ
 - 四 アジュの登場
- おわりに

はじめに

モンゴル帝國第四代の大カアン、モンケ（憲宗）は、その治世の七年（西暦一二五七年、南宋遠征を命じ、自らも軍を率い、四川方面へと出發した。ところが、彼は翌年秋七月（舊曆）、前線の合州附近の釣魚山で、軍中に蔓延した傳染病によつて死亡した。これにより、彼の意圖した南宋覆滅の事業は頓挫を來したばかりでなく、大カアン位をめぐる弟のクビライとアリクブカの戦い、「アリクブカの亂」を引き起こすこととなった。

五年後、クビライの勝利によつて、この戦争が終結すると、モンゴル帝國は分立へと進み始める。その後、所謂「カイドゥの亂」が起こり、分立の傾向は一層深まつて、モンゴル帝國は再び統一されることはなかった。クビライの政權は、

中央アジアでのカイドゥとの戦いには苦戦する一方で、南宋攻略を進めていく。五年近くの包圍戦の後、至元十年（一二七三年）に襄陽を陥落させる。そして、至元十三年（一二七六年）には、首都臨安を降伏させ、殘存勢力を至元十六年、崖山で滅ぼした。ここに「中國」全土を支配することとなった「元朝」は、傳統的な中國王朝の形も取るに到る。

このように見ると、モンケの南宋遠征からクビライの政權樹立、南宋征服へと續く時期は、二つの立場からみて重要であるといえる。一つは、モンゴル帝國史の立場からである。この時期は、急激に擴大してきたモンゴル帝國の、統一から分立への轉換期であるためである。又一つは、中國史の立場からである。こちらでは逆に、この時期に、分立から統一へ轉換した。北宋滅亡以後、南北に分裂していた状態から、百五十年ぶりに統一王朝が出現したためである。従って、モンゴル帝國史、中國史どちらの立場からも、この時期の政治過程の解明は不可欠であると考えられる。

従来からこの時期は注目され、研究されてきた。それらのなかでは、クビライ政權成立の基盤を求めたものが目立つ。その一つは、東方三王家がクビライ政權に大きく關與したとするものであり、もう一つは、漢人軍閥の役割を重視し、クビライ政權の中核が漢人軍閥であったとするものである。これらの研究により、クビライ政權成立時の状況が明らかにされつつある。だが、チンギス・ハン以来のモンゴル部族集團がどう動いたかという問題については、まだ研究は不十分と言わざるをえない。最近、特定のモンゴル軍閥についての研究が現われた段階である。⁽¹⁾

筆者は、モンゴル部族集團および漢人軍閥が、クビライ政權の成立から中國全土を支配した時期にどの様に存在し、政權にどう關わったか、に關心をもっている。この問題を解明するためには、當該期の政治史に目を配りつつ、個々の集團の動向を考察しなければならない。そこでまず、上述の政治過程に一貫して關與したモンゴル部族集團を取り上げ、その動向を中心に政治過程を追うことにしたい。そのモンゴル部族集團が、表題にあるスベエテイ家であり、その麾下の軍閥である。スベエテイ家とは、ウリヤンカン部族のスベエテイ *Subetei* ⁽²⁾ を事實上の始祖とする一家である。その子孫、主にウリヤンカダイ、アジュ、ブリンギダイの三代が、この時期の政治過程の中できわめて大きな役割を果たしているのだ

ある。本稿は紙数の關係上、そのうちクビライ政權成立直後までの時期に限るが、これにより、從來知られていなかった、この家の重要性が明らかにできれば幸いである。

一 モンケとウリヤンカダイ

本章では、憲宗モンケ朝におけるスベエテイの子ウリヤンカダイ Uriangqadai の地位を探るため、モンケとの關係を考察する。

モンケとウリヤンカダイの關係は、モンケの幼少時に始まる。王惲「大元光祿大夫平章政事兀良氏先廟碑銘」⁽³⁾（以下「先廟碑銘」）のウリヤンカダイの條、冒頭に次の記述がある。

太祖に事^{つか}う。憲宗、方に誓^{ちか}ひたり。公、佐命の故家なるをもつて、これに付して護育せしむ。長ずるに及び、……宿衛を分掌⁽⁴⁾す。

これにより、以下のことがわかる。ウリヤンカダイは、當初チンギス・ハンに仕えた。モンケは、當時幼少であったが、ウリヤンカダイは、功臣の家柄であるため、モンケの守り役となった。モンケの成長後、彼の宿衛の一部を管掌した。つまり、ウリヤンカダイは、モンケの近臣、ケシクの將軍として、重要な人物であったといえるのである。

モンケとウリヤンカダイの關係の密接さは、兩者の父、すなわちトゥルイとスベエテイの關係に由來する。チンギス・ハン没後、スベエテイの千戸が、左翼の一つとしてトゥルイの相續分に含まれたこと⁽⁵⁾もその一例である。また、『元史』卷一二一、速不台傳は、兩者の關係について、興味深い挿話を傳えている。太宗ウゲデイの二年（一二三〇年）、金攻略のため、要衝の潼關攻撃に参加したスベエテイは、敗戦の責任をウゲデイから問われた。それに對してトゥルイが辯明して、ようやくその後の功績を條件に許される。そしてトゥルイに従い共に河南經略にむかうというものである。⁽⁶⁾このように、父の代からのつながりが見られるので、スベエテイ家は、トゥルイ家の近臣の家であると言える。

話をモンケとウリャンカダイに戻し、ウゲデイ、グユク期の兩者の動向について考えたい。先にも言及した金攻略にはモンケも参加しているので、そのケシクの將軍ウリャンカダイも参加したと考えられる。ウゲデイの五年（二三三年）の遼東の蒲鮮萬奴討伐にウリャンカダイはグユク（定宗）に従い参加している。⁽⁷⁾『元史』卷二、太宗本紀にはグユクとアル

チダイに「左翼軍」を率いさせた、とある。この左翼とは東方諸弟ではなく、左翼の千戸群をさすと考えれば、ウリャンカダイはスベエテイ家の代表として派遣されたのかもしれない。さらに、有名なバトゥ、スベエテイのロシア・ヨーロッパ遠征に、モンケも参加しており、ウリャンカダイはモンケと共に参加したと考えられる。

周知のように、定宗グユク没後、大カアン位をめぐってウゲデイ家とトゥルイ家の抗争が起こり、結局ジョチ家のバトゥの協力を得たトゥルイ家のモンケの即位によって決着がついた。この際にウリャンカダイは、バトゥと協力し、クリルタイでモンケ推戴の演説をするという重要な役割を果たしているのである。

モンケ即位の際のクリルタイは三回行なわれたが、その第一回、己酉年（二四九年）の阿剌脱忽刺兀でのクリルタイの様子について、『元史』卷三、憲宗本紀に詳しい記事がある。出席者は、諸王バトゥ、ムゲ、アリクブカ、スイゲトウ、タガチャル、大將ウリャンカダイ、スニタイ、テムデル、イエスブカ。最初にバトゥがモンケ推戴を建議した。ところが、グユクの皇后オグルガイミシユの使者バラの抗議があった。それに對してモンケの庶弟ムゲが反論し、バラは沈黙する。そこでウリャンカダイが、あらためてモンケ推戴の辭、バトゥに賛成の意を述べる。それを承けてバトゥがモンケ推戴を集會者に告げ、みなそれに賛成して、モンケの即位が決定する。⁽⁸⁾

実際には、ウゲデイ家側の抵抗があつて、モンケの即位は、二年後（二五一年）、オノン河畔のクリルタイで最終決定される。しかし、この憲宗本紀の記事によつて、ウリャンカダイがクリルタイに出席し、諸王達とともに發言できたこと、バトゥと協力してモンケを推戴したことが分かる。そこで次に、當時のウリャンカダイの立場について考えたい。

彼の當時の立場については、以下の二點に注目したい。第一は、言うまでもなく彼がモンケのケシクの將軍であつたと、第二は、彼の父スベエテイが、グユク崩御の年（一二四八年）、トーラ河畔で没していることである。⁽⁹⁾ 彼がクリルタイに出席し發言できたのは、大カアン位候補者モンケのケシクの將軍としての地位にもよるが、スベエテイ没後、その長子としてスベエテイ家の代表としての地位と立場があつたためであらう。つまり、ウリヤンカダイには、スベエテイの絶大な功績が背後にあり、その發言には重みがあつたのである。また、スベエテイが既に没していたことは、バトゥとの協力に利した可能性がある。というのは、バトゥとスベエテイは、ロシア・ヨーロッパ遠征の際、ハンガリーで作戦上の齟齬から不和をきたした事があり、ウゲデイ崩御後のクリルタイに、バトゥが参加しようとしなかつた際には、スベエテイがそれを非難したことが、『元史』卷一二一、速不台傳に傳えられているからである。⁽¹⁰⁾

新たに成立したモンケ政權において、ウリヤンカダイの地位が高いことは、モンケの幼少時から政權成立までの兩者の關係からしても、想像に難くない。その實際は、次章でも述べるが、ここでは、三點附け加えたい。

一つめは、モンケ時代におけるスベエテイ家の状況についてである。『集史』は、スベエテイ没後、その千戸は、彼の子のククチュ・*Kököču* が嗣いだ⁽¹¹⁾と傳える。したがつて、ウリヤンカダイは、モンケ政權中央にケシクの將軍として、一方ククチュはスベエテイ以來の千戸を率いる、という二重の體制になつていたのである。このことを裏付けるのは、『元史』卷九五、食貨志三、歲賜の記事である。その諸勳臣への分撥地と戸數が述べられる中に、以下のようにある。

速不台官人 (*Subetei noyan*) : 五戸絲、丁巳年 (憲宗七年、一二五七年)、分撥汴梁等處一千一百戸。……

兀里羊哈歹千戸 (*Uriangqadai mingqan*) : 五戸絲、戊午年 (憲宗八年、一二五八年)、分撥東平等處一千戸。……

憲宗七年は、既にスベエテイの死後であるから、彼の後繼者に對してのものと見える。「兀里羊哈歹」は、憲宗朝で新たに分撥を受けるほどの人物とすればスベエテイの子のウリヤンカダイ以外考えられない。そうすると、「速不台官人」はククチュへの、「兀里羊哈歹千戸」はウリヤンカダイに對するものであり、分撥地を別個に與えられている事は、當時

スベエテイ家が二重體制になつていたことを示すと考えられるのである。また、ウリヤンカダイがケシクの將軍であると同時に千戸であつたこともこれによりわかる。⁽¹²⁾

二つめは、スベエテイの兄、クルグン（忽魯渾）の子カダン Qaḍan（合丹）が、モンケの三年に、イエケジャルグチとなつてゐることである。⁽¹³⁾ 傍系のクルグン家までが、このように重要な地位についてゐることは、やはりモンケ政權における、スベエテイ家の地位の高さを物語るものである。

三つめに、ウリヤンカダイの名が、ペルシア語で書かれたチングス・ハン家等の系譜集 *Shu'ab-i Panjgāna* 及び *Mu'izz al-Ansāb* に、モンケ・カアンのアミール達の中に記されている事を述べておきたい。⁽¹⁴⁾

二 クビライの雲南遠征とウリヤンカダイ

本章では、クビライとウリヤンカダイの最初の接点である雲南遠征における兩者の關係とウリヤンカダイの地位について考察する。

憲宗モンケは、その即位の翌年から、つぎつぎと帝國の東西方面への遠征命令を發した。ウリヤンカダイは、このうち南宋遠征の準備として、雲南遠征に参加したことが、「先廟碑銘」はじめ諸史料によつて知られる。ところが、『元史』卷三、憲宗本紀の諸遠征の命令を記した箇所には、それとは一見矛盾した記述が見られる。そこで、まずそれについて検討したい。

憲宗本紀には次のようにある。

〔二年壬子（一二五二年）〕秋七月、忽必烈に命じて大理を征せしめ、諸王禿兒花、撒（丘）〔立〕に身毒を征せしめ、怯的不花に沒里奚を征せしめ、旭烈に西域素丹諸國を征せしむ。（同上）冬十月、諸王也古に命じて高麗を征せしむ。

〔三年癸丑（一二五三年）〕夏六月、諸王旭烈兀及び兀良合台等に命じて師を帥いて西域哈里發八哈塔等の國を征せしむ。又、塔塔兒帶撒里、土魯花等に命じて欣都思、怯失迷兒等の國を征せしむ。

これにより、東方では、弟クビライの雲南の大理遠征とイェグウの高麗遠征、西方では、弟フラグとウリヤンカダイによるバクダードのアッバース朝遠征とケドブカのイスマイル派遠征、及び諸王トルカ、タタール部族のサリ・ノヤンのヒンドウスターン、カシュミール遠征の命令が發せられたことがわかる。

ここで注目すべきは、ウリヤンカダイが、フラグの西アジア遠征の將軍の筆頭として名を擧げられていることである。

この記事の他の箇所が漢文史料、ペルシヤ語史料によって裏付けられる以上、この箇所のみが誤っているとは考えられない。ウリヤンカダイは、この記事の後に雲南遠征に轉用されたの⁽¹⁵⁾だろうか。ウリヤンカダイが轉用された事を述べる史料はない。そして、同じ憲宗本紀の三年九月の條に、クビライが忒剌（現甘肅省）の地に宿營し、そこから三軍に分かれて進軍したとある。世祖本紀一の同年九月壬寅の條にも同じ内容の記事があり、三軍の一角がウリヤンカダイの軍であることが分かる。となると同じ年の夏六月は、すでに出發後であつたのではなからうか。同一人物がフラグの西征の將軍に任命された可能性は少ないと考える。ならば「ウリヤンカダイ」とは、ウリヤンカン部族の男という意味であるから、問題にしているウリヤンカダイ以外のウリヤンカン部族の人間が任命されたと考えられまいか。例えば、この記事で、ヒンドウスターン遠征を命じられているタタール部族のサリ・ノヤンは、後半で「塔塔兒帶撒里」と記されている。この「塔塔兒帶」は、タタール部族の男である事を示しているに過ぎない。これに類したことが「兀良合台」でもあてはまりうる。實際、イル・ハン國では、フラグの遠征軍起源のウリヤンカン部族のアマールの活躍が、スベエテイ家を含め、認められる。⁽¹⁶⁾ただし、轉用か別人かを決定するだけの史料は現在の所見いだせない。

次に、本題の雲南遠征におけるクビライとウリヤンカダイの關係について検討したい。

ウリヤンカダイの雲南遠征については、ラシード『集史』部族考、ウリヤンカト部族の條に、次のように伝えられてい

「スベエテイは」もうひとりの息子を持っていて、ウリヤンカダイ (Uriyankatai) という名であり、モンケ・カアン (Mongku qan) の御世で、大將軍 (Iashkar kashu buzurg) であった。そして、その時、自分の兄弟のクビライ・カアン (Qubilai qan) を、カラジャン (Qarjank) 地方の方へ、10トマンの軍と共に派遣した。その軍の長 (muqaddan) は、ウリヤンカダイであった。そして「モンケ・カアンは、次のように」命令した。クビライ・カアンと全軍は、ウリヤンカダイの命令「(の下)」にあれ、と。その國は、カアンの御座のある所から極めて遠かった。それゆえ、約一年間の道のりであった。その地の空氣は、たいへん汚れていて悪く、全軍が病氣になってしまったのであった。かつ、その國は極めて人が多く、その軍隊が多かった「(ので)」毎日宿營ごとに一戦することが必要であった。この二つの理由で、その10トマンの軍のうち、2トマン以上がもどつてこなかった。

さて、この記事のなかで注目すべきは、遠征軍の總指揮權をウリヤンカダイが有していて、クビライも、彼の指揮權の下にあったとされていることである。従來、この遠征は「クビライの雲南遠征」として知られ、ウリヤンカダイはその配下の一軍を率いる將軍と考えられていた。それが、この記事では、兩者の立場が逆轉して書かれている。では、この記事は、ラシードの誤傳であらうか。

實は、漢文史料のなかにも、ウリヤンカダイが總指揮權を有していたことを述べるものがあるのである。「先廟碑銘」に「歲壬子、時に世祖皇帝、潛にあり、詔を奉じて西南の諸夷を征す。公(ウリヤンカダイ)に命じて大營の軍馬を總督せしむ。」とある。東西兩史料の一致は、ウリヤンカダイが指揮權を有していたことの證左とならう。もちろん、クビライが大カアンになってから書かれた諸史料は、クビライの立場を稱揚して書いている。例えば、經世大典序錄、政典、征伐、雲南(『國朝文類』卷四一)には、「兀良哈台に命じて先驅たらしむ。」とある。また、『元史』卷四、世祖本紀一、歲癸丑、九月壬寅の條には、軍を傳統的な三軍編成にしたことが述べられ、中道からクビライが、西道の兵をウリヤンカダ

イが、東道の兵を諸王抄合、也只烈が率いたことが述べられ、クビライが總大將であつたように書いてある。⁽¹⁸⁾しかし、『集史』、『先廟碑銘』にしても、クビライ政權成立後のものであり、それにもかかわらず、ウリヤンカダイの總指揮權について書いている事は重視すべきである。加えて、前章で見たようなモンケとウリヤンカダイの關係を考えれば、彼の總指揮權も不自然ではないと考える。

遠征の過程、ルート等については、幾多の先行研究がでているので、詳しくはそれらに譲るが、雲南遠征には二つの段階があつた。それは、雲南西北部の大理攻略と、東南部の善闡方面攻略である。大理攻略はモンケの三年末に成るが、善闡方面攻略が成るのは、モンケの五年のことであつた。

このうち、前半の大理攻略の終わった段階で、ウリヤンカダイを残して、クビライは歸還してしまふ。『元史』卷三、憲宗本紀、三年癸丑冬十二月の條に「大理平らぐ」、四年甲寅、冬の條に「忽必烈、大理より還り、兀良合台を留めて諸夷の未だ附せざる者を攻めしめ、獵所に入覲す。」とある。また、『元史』卷四、世祖本紀一、歲癸丑、十二月の諸條にも、大理陷落の時點の事情が記された後に「大將兀良合台を留めて戍守せしめ、劉時中をもつて宣撫使と爲し、段氏とともに大理を安輯せしめ、遂に師を班す。」とある。⁽²⁰⁾

クビライの中途歸還の不自然さは、西アジア遠征にむかつた弟のフラグの行動と比較すると際だつ。モンケに命じられた目標にむかつて、それを忠實に遂行して行くフラグに對して、遠征半ばで歸還したクビライは、その後の三年間、漠北の夏營地冬營地の間を行き來し、大きな動きを見せていない。⁽²¹⁾中途歸還とその後の行動の理由は何か、それをはっきりと述べる史料はない。しかし、指揮權を持つウリヤンカダイと身分は上のクビライの關係は微妙であつたのではないか。果たしてそれが中途歸還のきっかけかどうか、それ以上の想像は差し控えたい。ただ、モンケの七年になつて表面化したモンケとクビライの不和は、この遠征中途の歸還あたりから始まるのではないかと思われ、⁽²²⁾不和の可能性さえあることを述べておきたい。

話を、クビライ歸還後のウリヤンカダイに移す。彼は、大理陷落の後には、副都の善闡攻略に向かい、さらに周邊部の經略を進めてゆく。そして、二年足らずのうちに「大理の五城、八府、四郡を平らげ、烏・白等の蠻三十七部に泊および」、魯斯、阿伯等の城も歸附したとい(23)う。

その後も、ウリヤンカダイは雲南に留まるが、乙卯（二五五年）の秋から翌丙辰年にかけては、命を受けて東北に進路を取り、四川に侵入する。そのルートは、烏蒙から長江ぞいに下り、重慶、合州にむかうものであった。一方、北方の利州からテゴゴルチが、興元府からはタイダルが、彼に呼應して南下し、合州で合流する。この作戦は、いわば敵前突破であり、途中、南宋軍と戦いながらの進軍であった。ウリヤンカダイは、モンゴル帝國の四川攻略の一環にも参加したのである。(24)

丁巳年（二五七年）、ウリヤンカダイは、モンケに使者を遣わして、雲南平定の報告とその後の經營の進言を行なった。モンケは、それに對し、ウリヤンカダイと軍に、銀五千兩、綵緞二萬四百疋（「先廟碑銘」）を賜い、彼に、大元帥の稱號と銀印を與えて、なおも雲南に鎮するよう命じた。(25)「大元帥」なる稱號は、他に例がないが、先に引いた『集史』部族考の中の「大將軍(lashkar kashī buwang)」に相當すると考えられる。銀印を與えられている所からみて、この地位が、諸王に次ぐ高いものであったことが分かる。また、先にも述べたが、この年、彼の屬するスベエテイ家に對して、沐梁等處の一千一百戸が分撥され、翌年には、ウリヤンカダイ自身にも東平等處の一千戸が分撥されている。これはウリヤンカダイの功績に對する褒賞の意味もあつたと考えられる。

雲南の大理に戻つたウリヤンカダイは、今度は東南に矛先を向け、安南の陳朝攻略を開始する。この作戦にも南宋攻略の準備としての性格があつたことが、後に同じルートで、ウリヤンカダイが南宋に侵入している事より分かる。ウリヤンカダイの陳朝攻略の詳細については、陳智超氏の先行研究に譲るが、注意したいことが一つある。それは、「先廟碑銘」に、この際の軍の編成が記されている事である。傳統的な三軍編成で、先鋒チヤシムダヤ徹徹都 Cēcētū、中軍ウリヤンカダイ、後

詰駒馬懷都^{カイドウ} Qaidu であった。先鋒のチュエグトウは不詳だが、後詰の駙馬カイドウは、オンギラート部族のチグウ Cigu 家出身であり、バイクウ Baigu 公主をめとった人物である。⁽²⁷⁾この時期、雲南に鎮した人物のなかにオンギラート部族が含まれている點が興味深い。

さて、以上みてきたモンケ時代の雲南遠征について、まとめておきたい。(1)この遠征は單獨ではなく、モンゴル帝國の東西への遠征計畫の一環であり、南宋攻略の前段階の意味があった。(2)この遠征は、從來「クビライの雲南遠征」として知られるが、總指揮權はウリヤンカダイが有していた。しかも、クビライは中途歸還し、その後の經略はすべてウリヤンカダイによる。したがって、むしろ「ウリヤンカダイの雲南遠征(および經略)」とするほうが實狀に近い。(3)、(2)と関連して、ウリヤンカダイが、このような重要な戰略を擔當したことは、モンケ政權における彼の重要性を示すものである。(4)クビライとウリヤンカダイの間には、モンケとの間に見られたような、密接な關係を示すものがない。

三 クビライ政權の成立とウリヤンカダイ

モンケの七年(一二五七年)九月、大カアン、モンケは、自ら南宋遠征に出發した。本稿冒頭にも述べたように、この遠征の途中、四川の前線で彼は死亡する。そして、その後の大カアン位争いは、最終的にクビライ政權の成立に歸着する。この南宋遠征においては、途中で大きな計畫變更があったことが指摘されている。⁽²⁸⁾當初の計畫は、次のようであった。遠征軍は、モンケ本軍、諸弟オッチギン家のタガチャル軍、そしてウリヤンカダイ軍の三軍で構成された。モンケとの不和があったクビライは、既に雲南遠征の功績があり、病氣であるとの理由で、遠征軍から外される。最初の攻撃目標は、襄陽であった。タガチャル軍が北正面から、ウリヤンカダイ軍が雲南からヴェトナム、湖廣經由で南背後から、襄陽を挟み撃ちにする。タガチャル軍とウリヤンカダイ軍の攻略した後を、モンケ軍が進軍する豫定であった。ところが、タガチャル軍が、襄陽の攻撃開始早々退却してしまったため、計畫の齟齬をきたし、變更を餘儀なくされた。タガチャルに代

わって、急遽クビライを起用せざるを得なくなった。すでに當初の計畫によって、モンケ軍とウリヤンカダイ軍は、行動を開始したが、クビライ軍は準備に手間どり出發が遅れる。そのため、とくにモンケ軍は、四川の前線で單獨で戦わなければならなくなり苦戦する。それが、傳染病の發生、前線でのモンケの死の背景となる。

ところで、この遠征がきっかけとなってクビライ政權が誕生する事から、クビライ軍の動向のみが、從來は注目されてきた。それに對し、ウリヤンカダイは、たんに、搦手の一將軍だとして、その動向は、ほとんど注目されていない。しかし、ウリヤンカダイは、當初および變更後のどちらの計畫においても、三軍の一を率いているのである。各軍の長は、彼以外はすべて、チンギス・ハン家であることからすれば、これも彼の重要性を示すものといえる。この南宋遠征における、ウリヤンカダイの役割は、從來考えられてきたより大きいのではなからうか。以下、彼の動向を具體的に追ってゆきたい。

モンケの七年（丁巳年、一二五七年）ウリヤンカダイは、雲南から北上し、六盤山を経て臨洮府に至り、そして軍を率いて南下しつつあったモンケに會い、月餘にして歸還する。この際に、モンケ、タガチャル、ウリヤンカダイによる變更前の計畫の最終決定が行なわれたと考えられる。そして十一月から、ウリヤンカダイは、雲南よりヴェトナムへ進攻した。これは、先述したように、ヴェトナム北部を通過して南宋領内へ入るための準備行動である。そしていったん雲南にもどる。實はこの時點に、タガチャル軍は、襄陽攻撃をやめて歸還してしまい、計畫の齟齬のきっかけとなるのだが、すぐにはウリヤンカダイもそれを知る由もなかっただろう。翌戊午年（モンケ八年、一二五八年）二月に、ヴェトナム陳朝國王の壻と使者が、ウリヤンカダイのもとにやってきたのを、モンケの下に送る。⁽²⁹⁾陳智超氏の研究によれば、この年九月から十一月にかけて、ウリヤンカダイ軍が、廣西に侵入したが、十一月十八日突然撤退したことが認められるという。⁽³⁰⁾變更前の計畫により南宋に進攻したが、計畫の變更を途中で知って引き返したものと思われる。

「先廟碑銘」では、己未（モンケ九年、一二五九年）夏、雲南のウリヤンカダイは、明年正月に長沙に集結するよう、モン

ケの使者から命令を受け取った、という。だが、この當時モンケは、四川の前線で苦戦の最中であり、記年は『元史』卷一二一、兀良合台傳の戊午が正しいと思われる。この命令は、計畫變更後の、クビライ軍が鄂州を攻撃することに對應させるためのものであることは確かである。

ともあれ、この命令にしたがつて、その秋にウリヤンカダイは再び出發した。そこで、ウリヤンカダイの南宋遠征軍の構成はどのようなものであったかをみてゆきたい。この軍の構成、とくにモンゴル軍がどのようなメンバーであったか、が後に重要となるためである。『先廟碑銘』には、「この秋、四王の兵三千騎、蠻・爨萬人を率い、」とある⁽³¹⁾。また、『集史』モンケ・カアン紀には、「モンケ・カアンの右翼は、スベエテイ・バハドルの子であり、10トマン〔の軍〕といっしよで「あった」」とあるのみだが、クビライ・カアン紀には、次の記述がある。「それより前に、モンケ・カアンは、軍隊をナンキヤスの一方から派遣していた。その軍の長はウリヤンカダイ〔であり〕、3トマンほど〔であった〕。そして、〔モンケ・カアン〕は、チャガタイの孫のアビシユカ〔という〕名〔の王子〕と左翼の諸王五十人をとともに派遣した」⁽³³⁾。

『先廟碑銘』の「四王」が何をさすのか、『元史』卷一二、兀良合台傳、『通鑑續編』等、他の漢文史料にも、「四王」とあるのみで説明がない。ただ、『集史』の記事によつて、右翼チャガタイ家のアビシユカの他、五十人という數字には疑念が残るが、左翼諸弟家の諸王が多數參加していたことが分かる。「四王」とは、これら諸王の中に重要な者が四名いたことを示しているのかも知れない。また、「三千騎」、「萬人」、「10トマン」、「3トマン」といった數字は、實數をどれほど反映しているかはともかく、かなりの大軍であった事は分かる。また前章で述べた年のヴァトナム陳朝侵入に參加したオンギラト部族のカイドゥも、時期的にみて參加した可能性が極めて高い。さらに「蠻・爨萬人」は、大理及び合刺章の人間よりなる軍で、實際にウリヤンカダイとともに南宋領内、鄂州を經由して開平府にまで到ったことが確認される⁽³⁵⁾。

このようにみえてくると、ウリヤンカダイの軍は、他の二軍と比して、規模では劣るものの左翼諸王が多く参加していた点で、その歸趣は、後の大カアン位争いの際も重要であったと考えられる。⁽³⁶⁾

さて、ウリヤンカダイ軍が再出發したのは、「先廟碑銘」の記載では己未年（一二五九年）の秋、四川釣魚山でモンケが死亡したのが、同年秋七月癸亥（憲宗本紀）である。そうすると、ウリヤンカダイ軍はモンケの死の情報をつかむ前に、南宋領内に突入した可能性がある。その後の行軍も四面敵のなか苦難に満ちたものであった。途中どの時点でウリヤンカダイがモンケの死を知ったかは不明であるが、南宋側は、四川のモンケ本軍の動きからかなり早く察知したことが知られる。⁽³⁷⁾ そうなると、南宋領内に孤立するウリヤンカダイ軍は、きわめて危険な状況にあったことは確かである。

となると、ウリヤンカダイ軍のとりうる道は、鄂州のクビライ軍と合流して北還する事以外にはない。實際、ウリヤンカダイはそうするのである。

「先廟碑銘」には、南宋領内でのウリヤンカダイ軍の進路が記されている。記された地點を列挙すると、横山寨、老蒼關、貴州、象州、靜江府、辰州、沅州、潭州の順である。この進路の記載には早くから疑問が持たれ、辰州、沅州の記載は誤りであると指摘されている。しかし、ウリヤンカダイ軍が、モンケから受けた命令どおり長沙（潭州）に到着したことは確かである。ウリヤンカダイ軍は、潭州攻撃を行なったが成果ははかしくなかった。

この潭州攻撃中のウリヤンカダイ軍と、鄂州攻撃中のクビライ軍の連絡がついたのは『元史』卷四、世祖本紀一によれば、十一月丙辰のことである。そこには「兀良合帶、地を諸蠻に略して、交趾より邕、桂を歴て、潭州に抵る。帝の鄂に在るを聞き、使を遣はして來告す。」とある。また、『元史』卷二二、兀良合台傳には、クビライが也里蒙古に二千人を率いさせ來援に赴かせたこと、その後、鄂州より東方に下った潁黃州で長江を北に渡ったと記されている。『元史』卷二二、鐵邁赤傳には、さらに詳しく、鐵邁赤⁽³⁸⁾ Temeci が、「練卒千人、鐵騎三千」を率いて、ウリヤンカダイを岳州に迎え、江夏（鄂州）、黃州を経たことが記される。

つまり、ウリヤンカダイ軍は、鄂州のクビライ軍と連絡をとり、援軍を得てようやく局面を打開するのである。したがって、ウリヤンカダイにとつては、クビライとの関係が良かろうと否であらうと、大カアン位をめぐる争いでは、クビライ側につくことが決定されたのであった。

今度は、クビライの立場を考えてみよう。クビライがモンケの死を知ったのは、淮水渡河以前、汝南においてであった。⁽³⁹⁾すると、大カアン位を争う相手のアリクブカが、カカולםで留守を預かるという有利な立場にいるのであるから、すぐにも歸還するのが通例考えられる行動である。それにもかかわらず、クビライがさらに南下したのは、ウリヤンカダイ軍を自己の側に附ける必要があったからである。ウリヤンカダイ軍が、クビライにとつて重要であった理由は、ウリヤンカダイ軍のなかの左翼の諸王たちを救うことが左翼のオッチギン家のタガチャルの協力を得るには必要であったため、モンケ朝の重臣ウリヤンカダイを自己の側につけることにより、その他のモンケの臣下を吸収する助けとなるため、の二つが考えられる。

もっとも、クビライ自身は、ウリヤンカダイ軍が到着する以前に、アリクブカの動きに對抗するため、重臣バートルBatürに後事を託して、一足先に歸還している。⁽⁴⁰⁾ところで、『集史』モンケ・カアン紀、クビライ・カアン紀兩方に、クビライとウリヤンカダイ、そしてこのバートルも含めた興味深い記事がある。それは、クビライがこの二人に相談して、二人に後事を託して歸還するというものである。⁽⁴¹⁾これは、嚴密に言えば事實に反するかも知れない。しかし一概に否定しすることもできない。というのは、この記事には、ウリヤンカダイが、クビライ政權樹立へ参加したことの重要性、とくにクビライ側から見たそれ、が反映されていると考えられるためである。

さらにつづくわえると、ここでウリヤンカダイとバートルの二人の名が、クビライの相談相手としてあげられているのは、後の元朝期の状況を考えると實に示唆的である。バートルはジャライル國王家チラウンの子であるが、彼はクビライ政權誕生後、間もなく死す。しかし、彼の子ハントム(安童)は、きわめて重用される。一方ウリヤンカダイの子アジュ

も、南宋攻略において重要な役割を果たす。そして、その後もウリヤンカダイとバートルの子孫の密接な関係が確認されるのである。⁽⁴²⁾

以上述べたように、ウリヤンカダイはクビライ側につかざるを得なかった。だが、クビライ即位時、および對アリクブカ戦でのウリヤンカダイの行動は不明である。「先廟碑銘」には、庚申（中統元年、一二六〇年）夏に、ウリヤンカダイが上都（當時はまだ開平府）に到った事を記すのみである。先にも述べたが、ウリヤンカダイとともに雲南を出發した「蠻・爨」軍は、中統二年五月三十日に上都附近に駐屯していたことが、王惲の「中堂事記」により分かるが、ウリヤンカダイ自身の動向は分からない。この事は、逆にウリヤンカダイのおかれたジレンマをあらわすと考えられまいか。ウリヤンカダイは、もとはモンケの側近であった。したがって、モンケ没後は、モンケの諸子に従うのが普通である。ところが、ゆきがかり上、おなじトウルイ家でもなじみが薄く、モンケとも不和であり、ウリヤンカダイ自身とも不和の可能性さえあるクビライに協力することになった。モンケの諸子アスタイ、ウルンタシュ等は、アリクブカ側についている。したがって、モンケの諸子との戦鬪だけではできない。

ウリヤンカダイが没したのは、「先廟碑銘」では、至元八年（一二七一年）、享年七十一と伝える。それまでの事績は、やはり知られない。⁽⁴³⁾ ウリヤンカダイの役割は、クビライ政權の成立まで、正確に言うとは直前までである。スベエテイ家も、世代交替の時期になっていたのだった。

四 アジュの登場

本章では、ウリヤンカダイの子アジュ⁽⁴⁴⁾はどのように政治史の表面に上ったかについて述べる。

ウリヤンカダイの子、アジュの事績は、雲南遠征から知られる。「先廟碑銘」には、ウリヤンカダイの條、アジュの條どちらにも、彼の活躍が記されている。そこで注目すべき事は、アジュの條に「白衣をもって、父都帥公（ウリヤンカダイ）

に従い、西南夷を征す」。「阿朮^{アジュ}、未だ名位あらず」とあることである。この段階では、アジュは、モンケから何の地位も與えられていなかったことが分かる。その後のクビライ政權成立にいたる過程におけるアジュの行動も、ウリヤンカダイと同様知られない。

その後のアジュの動向が分かるのは、中統二年（一二六一年）である。『元史』卷四、世祖本紀一、中統二年二月己亥の條に「宋兵、漣水を攻む。阿朮等に命じて兵を帥^{ひき}いてこれに赴かしむ。」とある。また、「先廟碑銘」アジュの條に、「宿衛將軍」とある。これから、アジュが、クビライのケシクの將軍となっていたこと、そして、山東南部の對南宋前線に派遣されていたことが分かる。アジュがクビライのケシクの將軍であったことは、ウリヤンカダイがモンケのケシクの將軍であったことを思い出させる。モンケ時代には、ウリヤンカダイがケシクにいて、スベエテイの千戸以來の部族集團は、やはりスベエテイの子と傳えられるククチュ^{Kukuchu}が率いる體制になっていたのだった。

では、この時期、スベエテイの千戸以來の部族集團を率いていたのは誰か、という問題が起きてくるが、その問題を解く鍵が、山東の漢人軍閥李壇が南宋と通じて中統三年（一二六二年）に起こした「李壇の亂」鎮壓戦に關わる諸史料中にある。まず、それを示す。

A. 『元史』卷五、世祖本紀二、中統三年三月癸酉…「史樞、阿朮に命じて、各々兵を將^{ひき}いて濟南に赴かしむ。李壇の軍に遇い、邀撃して大いにこれを破る。斬首四千。壇退きて濟南を保つ。」

B. 『元史』卷一四八、董文用傳…「(中統)三年、李壇叛いて濟南に據る。(文用、)元帥闊闕^{クワクエ}帯に従い、兵を統^すべこれを誅す。」

C. 『元史』卷二二〇、朮赤台傳附怯台傳…「李壇叛く。帝、哈必赤および兀里^{ウリ}羊^{ヤン}哈台^{ハカ}闊闕^{クワクエ}出を遣わし、往きてこれを討たしむ。」

D. 『元史』卷一三一、囊加歹傳…「(麻察、)諸王哈必赤および闊闕^{クワクエ}歹に従い、李壇を平らぐ。」

E. 『元史』卷五、世祖本紀二、中統三年九月癸酉…「都元帥闊闊帶^{クワクワイ}、軍に卒す。その兄阿朮^{アジュ}をもってこれに代え、虎符を授け、南邊の蒙古、漢軍を將いしむ。」

F. 「先廟碑銘」アジュの條(55)：「中統三年秋九月、宿衛將軍より、征南都元帥を拜し、金虎符^{キコ}を佩ぶ。兵を沐に治め、宿州を復立す。」

G. 『元史』卷五、世祖本紀二、中統三年十一月乙巳…「都元帥阿朮に詔して、兵三千人を分ちて阿鮮不花^{アセンブカ}、懷都^{カイドウ}の兵馬とともに、宿州、蘄縣、邳州を復立せしむ。」

以上示した史料から、次の事が読み取れる。ケシクの將軍アジュは漢人軍閥の眞定の史樞とともに、李璫討伐戦に参加していた(A)。都元帥ククテイ^{Kokotei}(ククチュ?)は、李璫討伐戦に参加していたが(B、C、D)、李璫敗死(七月)直後の九月、軍中に死亡する(E)。そこで、やはり李璫討伐に参加していた、彼の兄アジュを代わりに征南都元帥とし、汴梁に駐屯させ、對南宋前線(南邊)の蒙古、漢軍を管轄させる(E)。都元帥となったアジュは、さっそく宿州、蘄縣、邳州といった對南宋前線の諸都市を回復する命令を受け、實行する(F、G)。ククテイなる人物が「都元帥」として、スベエテイの千戸以來の部族集團を率いて汴梁にいたと考えられる。そして彼の没後、クビライは、自分のケシクから、アジュを代わりに送り込む。Dによれば、アジュは「其(ククテイ)の兄」とされているが、族兄である可能性がある。あるので、ククテイはウリヤンカダイの子だとは斷定できない。また、Cにのみ、「兀里羊哈台闊闊出」とあるが、これは、「ウリヤンカダイとククチュ」と讀むべきではなく、ウリヤンカン部族のククチュという意味であると考える。屠奇は、『蒙兀兒史記』卷二九速別額台傳附闊闊帶傳で「兀里羊哈台闊闊出」と「闊闊帶」は、語尾が異なっているだけであるから、同一人物であると主張する。兩者ともウリヤンカン部族であり、その可能性は大いにあり得よう。また、ククチュといえは、さきにスベエテイ没後、その千戸を率いた人物がククチュという名であつたことが『集史』に傳えられている事を述べた。それと、Cのククチュが同一人物である可能性も大いにある。ただ、ククテイ、ククチュに關わる史料

は、現在のところ見いだし得たのは、いまかかげたのみであり、残念ながらこれ以上の追求はできない。

Fの史料から、アジュが汴梁を根據地にしたと考えられるが、スベエテイ家と河南、汴梁とのかわりは、ウゲデイ時代の金朝殲滅戦に始まるのである。スベエテイが、潼關攻撃に失敗して、その責任を問われ、トゥルイに辯護された事は先に述べた。ウゲデイの三年（一二三二年）正月、金の完顔合達率いる主力軍との激突であった三峯山の戦では、スベエテイはトゥルイとともに戦っている。トゥルイと後からやってきたウゲデイは、この戦の後、夏營地の官山に歸還してしま⁽⁴⁶⁾う。その後の總指揮官はスベエテイであった。その間の事績は諸史料により確かめられる。そのなかで、注目すべきは次の史料である。

『金史』卷一一三、白撒傳…（正大九年三月、一二三二年）是時、速不^{スベエテイ}解等の兵、河南に散屯す。

『元史』卷二、太宗本紀…（太宗四年、一二三二年）三月、速不台^{スベエテイ}等に命じて南京を圍ましむ。金主、其の弟曹王訛可を遣わして入質す。帝還り、速不台を留めて河南を守らしむ。

『聖武親征錄』…（壬辰、一二三二年）三月、上（ウゲデイ）と太上皇（トゥルイ）、河を北渡し、暑を官山に避く。……速不台^{スベエテイ}拔都を留め、兵三萬をもつて、河南に守鎮せしむ。

スベエテイ麾下の軍が、河南に駐屯したことがこれらによって分かる。もちろん、この時の目的は、金朝残存勢力攻略である。汴梁陥落、金帝を追っての蔡州攻圍と陥落後の状況を直接示したものではない。また、スベエテイ自身は、この後、バトゥとともに、ロシア・ヨーロッパ遠征に向かう。だが、金滅亡後、河南南部は南宋との直接対立の場となるのであり、モンゴル側も軍を駐屯させていた。そのなかにスベエテイ家の一族も含まれていたと考える。

グユク時代、スベエテイがもとチンギス・ハンの第一百戸長であったタングート部族のチャガンとともにヒタイとマンジ方面に出兵したが、ジェワイニ『世界征服者の歴史』及び『集史』グユク・ハン紀に見え⁽⁴⁷⁾、河南方面との関わりが續いていたことを窺わせる。

モンケ時代、スベエテイ家と河南とのつながりを示す史料は、第一章でも觸れたが、『元史』卷九五、食貨志三、歲賜に記された次の一條である。

速不台官人…五戸絲、丁巳年、分撥汴梁等處一千一百戸。

丁巳年（モンケ七年、一二五七年）は、すでにスベエテイが没した後である。したがって、これは、スベエテイ家に對してのものと考えられる。また、この年は、ちょうどウリヤンカダイが雲南平定の報告をした年にあたる。彼の功績に對する恩賞の意味もあると考えられる。汴梁がスベエテイ家の分地となっているのは、もちろんスベエテイの金攻略に由來する。分地の問題は議論の對象となっていて、まだ決定案が出ていないが、少なくとも權益を有したのは確かであり、汴梁とスベエテイ家のつながりが續いていたことが分る。スベエテイの千戸を嗣いだククチュ、また、ククチュと同一人物の可能性のある、アジュ以前に都元帥として南宋前線の「蒙古、漢軍」をひきいたククテイの事績がほとんど知られないのは残念である。しかし、細々ながらもスベエテイの攻略以來、スベエテイ家と汴梁とのつながりがたどれる以上、スベエテイ家の一族が汴梁に駐屯していたと考えられる。

都元帥アジュがククテイに代わって率いることとなった、先のEの史料に見える「南邊の蒙古、漢軍」とは、どのような構成の軍團であつたのであろうか。それを一括して網羅的に述べた史料はなく、諸史料から再構成する必要がある。これについては、別稿で考察する豫定である。

おわりに

本稿では、スベエテイ家のウリヤンカダイ、アジュの動向に焦點を當てて、モンケ政權からクビライ政權成立直後の時期の政治史を考察した。はじめに述べたように、その後の政治過程つまり襄陽包圍戰と陷落、南宋征服とその後の統治の考察が必要であり、残された課題である。これらの時期に於いても、アジュとその子ブリンギダイは重要な役割を果たし

ている。そればかりでなく、アジュの麾下の軍團の人物とその子孫の中にも武宗カイシャン、仁宗アユルバルワダのクデーターや「天曆の内亂」の際に重要な役割を果たしたものが出てくる。これらの考察も残されている。

今後、残された課題を研究してゆく際に注意したいのは、次の三點である。第一は、軍團の構成と存在形態の問題である。つまり、アジュ等の軍がどこに、どのような形で生活していたのか、という問題である。第二は、漢人軍閥の問題である。たとえば、彼らが、軍團内でどのような地位、役割を持ち、存在形態はどのようなであったか、といった問題である。第三は出身部族の問題である。たとえばウリヤンカン部族のスペエティは、『元朝秘史』では「四匹の大」の一人であるが、戦闘の際には先鋒となるなど、ジャライル國王家のムカリが「四頭の駿馬」であるのに比べて地位が低いと考えられる。⁽⁴⁸⁾ チンギス・ハン、さらにはそれ以前からの部族の地位、性格がクビライ政権以後にどう影響していたか、という問題である。残された課題は多く、また難しいが、一步一步進んで行きたい。

註

- (1) 杉山正明「クビライ政權と東方三王家」(東方學報京都第五四號、一九八三年)は、東方三王家、とくにオッチギン家のタガチャルの役割を重視したもの。井戸一公「元朝侍衛親軍の成立」(九州大學東洋史論集第二〇號、一九八二年)、池内功「フビライ政權の成立とフビライ麾下の漢軍」(東洋史研究第四三卷第二號、一九八四年)は、漢人軍閥の役割を重視したものである。松田孝一「河南淮北蒙古軍都萬戶府考」(東洋學報第六八卷第三・四號、一九八七年)は、主題のモンゴル軍閥に焦點をあてた論考である。

- (2) スペエティの名稱について。本稿では、『元朝秘史』での

彼の名の記載「速別額台把阿都兒」に對する Ligeti の轉寫「Subeiei-batur」(Ligeti, L., *Histoire secrète des Mongols*, Budapest, 1971, p. 76 §120 等)に基⁽⁴⁹⁾き、「スペエティ」と表記する。

- (3) スペエティ家の傳記資料について。根本史料となるのが、この王惲「大元光祿大夫平章政事兀良氏先廟碑銘」(『秋澗先生大全文集』卷五〇)である。これは、成宗テムルの元貞二年のアジュへの贈諡の後、河南汴梁に建てられたと考えられる廟の碑文であり、スペエティ、ウリヤンカダイ、アジュ三代の事績を述べているものである。『秋澗先生大全文集』の

テキストは、四部叢刊本（明弘治十一年河南馬龍・金舜臣翻刻本）を用いたが、墨釘、脱字が多く、文意の通りにくい箇所がある。そこで、『元人文集珍本叢刊』（一九八五年、新文豐出版公司）所收の「明刊修補本」（このテキストは、かなり四部叢刊本を交えている）の『秋澗先生大全文集』及び、元、蘇天爵『國朝名臣事略』（元、元統三年刊本影照）卷二所收の「丞相河南武定王」（これはアジュの傳であるが、全てを王惲の「先廟碑銘」により、スペエテイ、ウリヤンカダイの部分もほぼ全文を記載する）の二つを用い、對校した。『元史』卷二二一、速不台傳、兀良合台傳、卷二二三、雪不台傳、卷二二八、阿朮傳は「先廟碑銘」の記年の脱落、誤りを正しうる點で重要である。

(4) 「先廟碑銘」(4a. 葉數表示は、四部叢刊本による)。この前の部分の原文は、「帥府君、諱兀良合歹。總戎府君長子也。／輔軍、事／太祖■(墨釘)。憲宗方誓亂……」示した部分の一行目二行目は五字下げになっており、脱字があるか。『國朝名臣事略』卷二「河南武定王」の該當部分は、「父、諱兀良合歹。太祖朝、憲宗方誓亂」であり、『元史』卷二二一、兀良合台傳では、「兀良合台、初事太祖。時憲宗爲皇孫、尙幼」とある。

(5) 『集史』チンギス・ハン紀「チンギス・ハンの軍隊」(Rashid, 130a) チンギス・ハンの軍隊の相續については、本田實信「チンギス・ハンの千戸」(史學雜誌第六二卷第八號、一九五三年)、杉山正明「モンゴル帝國の原像」(東洋史研究第三七卷第一號、一九七八年)参照。

(6) 『元史』卷二二一、速不台傳「潼關を攻むるに従う。軍、利を失す。帝、これを責む。睿宗、時に藩邸に在り、兵家は勝負常ならざるを言い、功を立てて自效せしめんことを請う。遂に命じて兵を引き、睿宗に従い、河南を經理せしむ。」

(7) 「先廟碑銘」(4b) 「辛巳、定宗に扈、女眞國を征し、萬奴を遼東に破る。」「『元史』卷二二一、兀良合台傳では、これを「歲乙巳」とするが、どちらも誤りで、元史標點本の校勘記が言うように(二九六頁)、癸巳(一二三三年)でなければならぬ。

(8) 『元史』卷三、憲宗本紀、「歲戊申、定宗崩ず。朝廷久しく君を立てず、中外恟恟として、咸帝を屬意するも覬覦する者衆く、議未だ決せず。諸王拔都、木哥、阿里不哥、唆亦哥禿、塔察兒、大將兀良合台、速你帶、帖木迭兒、也速不花、威阿剌脫忽刺兀の地に會す。拔都首に推戴を建議す。時に定宗皇后海迷失の遣わす所の使者八刺坐在在りて曰く、「昔、太宗命じて皇孫失烈門をもつて嗣と爲す。諸王百官皆與に之を聞けり。今、失烈門故より在るに、他の屬を欲するを議すは、將に之を何れの地に實かんとするや。」木哥曰く、『太宗命有り、誰か敢て之に違わん。然るに前に議して定宗を立てつるは皇后脱忽烈乃と汝輩之を爲すに由る。是、則ち太宗の命に違う者は汝等なり。今、尙誰か咎めんや。』八刺語塞がる。兀良合台曰く、『蒙古は聰明睿知にして、人威之を知る。拔都の議、良是なり。』拔都即ちに衆に申令す。衆悉く之に應じ、議遂に定まる。』この記事の戊申年(一二四八

年)は、グユクの没年であつて、クリルタイの開催年ではない。モンケ即位時のクリルタイについては、箭内互「蒙古の國會即ち「クリルタイ」に就いて」(『蒙古史研究』、一九三〇年、復刻版一九六六年、刀江書院、所収)の第五節「憲宗の選舉」参照。

- (9) 「先廟碑銘」(36)「公、定宗朝戊申年をもつて、禿烈河上に卒す。壽七十有二。」

- (10) 『元史』卷二二、速不台傳、辛丑および癸卯の條。辛丑の條は、Sajo 河畔にハンガリー王 Bela 四世の軍を破つた「サヨ河の戰」の記事である。この時、スベエテイは先鋒となつたが、先驅けしようとしたバトゥの軍が苦戰に陥り、バトゥ麾下の將軍ハハ禿が戰死した。その後、バトゥはスベエテイの救援の遅れを難詰したが、スベエテイの釋明により、事なきを得た。速不台傳のロシア・ヨーロッパ遠征記事については、岩村忍「元史速不台傳の西征記事に就いて」(『蒙古史雜考』、一九四三年所収。原載「蒙古學報」二、一九四一年)

癸卯の條には、「壬寅、太宗崩す。癸卯、諸王大會するも、拔都往かざらんとす。速不台曰く、『大王は族屬において兄たり、いづくぞ往かざるを得んや。』とある。

- (11) 『集史』部族考、ウリヤンカト部族の條。「彼(スベエテイ)には、一人の息子があり、左手に屬する千戸の阿米ールで、ククチュ Kukuja という名[であつた]。そして、スベエテイの[死]後、父の地位を得た。」(Rashid, 32a; Rashid/Ann-32a, p. 385) チングス・ハン紀「チングス・

ハンの軍隊」のスベエテイ・バートルの千戸の箇所にも同様の記事がある。(Rashid, 130a)

- (12) チングス・ハン時代にはケシクの長が千戸を領することはなかつたが、ウゲデイ時代にケシク制に改變が行なわれ、宿衛・箭筒士の長は千戸長でもあつたことが指摘されている。(本田實信前掲論文、七頁) このウリヤンカダイの例は、この指摘と關連があらう。

- (13) 『元史』卷三、憲宗本紀、三年、秋の條、「哈丹を札魯花赤と爲す。」黃潛「江浙行中書省平章政事贈太傅安慶武襄王神道碑」(『金華黃先生文集』卷二四)に「父曰、哈丹、太宗正府也可札魯忽赤。」黃潛撰の神道碑は、カダンの子テムル(イエスデル)のもの。ここで「太宗正府」とあるが、モンケ朝にこの名の衙門があつたことを意味するものではない。この碑文の成立は、至正八年以後であるから、撰文當時、相當する「太宗正府」の名を溯つて附して書いたに過ぎない。

- (14) *Shuh-i Panjgana* (131a) 以下「AWRYANKQDAY BHADR/Ūriyānqadai bahādur」(Kの一畫を缺つたもの)と正確に記されてゐるが、*Mu'izz al-Ansāb* (50a) では綴りが崩れる。この二書の性格および兩者の關係については、本田實信前掲論文一一一五頁、関野英二「ティムール朝における一貴顯の系譜」(オリエント第二〇卷第一號、一九七七年)三九、五八頁、杉山正明「西曆一三二四年前後大元ウルス西境をめぐる小札記」(西南アジア研究第二七號、一九八七年)二九頁、註(5)を参照。

- (15) この説は、志茂領敏「Ghazan Khan 政權の中核群について」(アジア・アフリカ言語文化研究第一八號、一九七九年)九二―九三頁で述べられている。
- (16) 前掲志茂論文九〇―九九頁。
- (17) Rashid, 32a; Rashid/Amir-3a-2c pp. 383—385. 引用文中の「」で囲った部分は、筆者が補なしたものの。以下同様。なお、『集史』モンケ・カアン紀、クビライ・カアン紀にクビライはナンキヤス(南宋)征服をモンケから命じられたが、その行程が困難であったため、ナンキヤス征服の準備として、カラジャン、チャガンジャン征服を行なう許可を求め、許された、との記事がある。(Rashid, 193a, 196b; Rashid/Blochet, p. 318, pp. 374—378)
- (18) 「九月壬寅、師、忒刺に次る。三道に分てもって進む。大將兀良合帶は西道の兵を率いて晏當路よりし、諸王抄合、也只烈は東道の兵を帥いて白蠻よりし、帝は中道よりす。」
- (19) 夏光南『元代雲南史地叢考』(一九三五年、中華書局)、松田孝一「雲南行省の成立」(立命館文學第四一八―四二二號、一九八〇年)、陳世松『蒙古定蜀史稿』(一九八五年、四川省社會科學院出版社)第四章、陳世松・喻亨仁・趙永康『宋元之際の瀘州』(一九八五年、重慶出版社)第四章、龔蔭『蒙古軍平大理の路線考辨』(民族研究一九八三年第二期)。
- (20) 本文に引用した箇所は元史世祖本紀の續きに「歲甲寅(一二五四年)、夏五月庚子、六盤山に駐す。」とある。一方、『析津志輯佚』(元、熊夢祥撰。一九八三年、北京古籍出版社)學校の條にクビライの即位前の令旨が載せられており、その一つの末尾に「甲寅年五月二十八日、六盤山の口子にて書いた(寫來)。」と發令の年月日、場所を示したものがあつた。五月二十八日は庚子にあたる。二つの記事により、クビライの歸還が裏付けられ、前年末より北還する途中の彼が、五月に陝西の六盤山に居たことが分る。
- (21) 『元史』卷四、世祖本紀一、歲甲寅、乙卯、丙辰の各年の記事による。
- (22) モンケとクビライの不和については、前掲杉山正明「クビライ政權と東方三王家」二七七―二八一頁参照。ウリヤンカダイとクビライの不和の可能性については、前掲池内功「クビライ政權の成立とクビライ麾下の漢軍」二五四頁及び二七三頁の註(62)参照。
- (23) 「先廟碑銘」(55a)。
- (24) この作戰については、前掲陳世松『蒙古定蜀史稿』第四章第三節「兀良合台自滇攻蜀」参照。
- (25) 『元史』卷二二、兀良合台傳「丁巳(一二五七年)、雲南平らぐをもつて、使を遣はして捷を朝に獻ず。且つ漢の故事に依り、西南夷をもつて悉く郡縣と爲さんことを請う。之に従う。其の軍に銀五千兩、綵幣二萬四千匹を賜い、銀印を授け、大元帥を加う。」
- (26) 陳智超「一二五八年前後宋、蒙、陳三朝間的關係」(鄧廣銘、程應鏐主編『宋史研究論文集』、一九八二年、上海古籍出版社、所收)。および山本達郎『安南史研究一』(一九五〇年、山川出版社)。

- (27) 耐馬カイドゥとバイクウ公主に関する石刻史料について、錢大昕が『十駕齋養新錄』卷一五、「朝城縣令旨碑」で考證している。
- (28) モンケの南宋遠征計畫とその變更については、前掲杉山正明「クビライ政權と東方三王家」に詳しい。以下の要約はこれによる。
- (29) 『元史』卷三、憲宗本紀、八年戊午（一二五八年）、二月、陳日煚、國を長子光岡に傳う。光岡、婿とその國人を遣わし、方物をもつて來見す。兀良合台、送りて行在所に詣らしむ。」
- (30) 陳智超、前掲論文の「四、一二五八年後宋、蒙、陳的三角關係」。
- (31) 「是秋、四王の兵三千騎、蠻・爨萬人を率い、横山寨柵を掠し、老蒼關を闢き、宋の内地を徇う。」(Gösta) 『元史』卷一二、兀良合台傳では、「四王の騎兵三千、蠻・爨萬人を率い」とする。同、卷一六六、信直日傳には、舊大理國王族の段興智と信直福が爨・蠻の軍二萬を率いて、ウリヤンカダイの雲南平定、ヴェトナム侵攻に協力した。そして、段興智は入朝の途中没したことが見える。ここの「蠻・爨」の軍も、彼らが率いていた可能性がある。
- (32) Rashid, 193b. プロシエの校訂本では、「スベエテイ・バートルの子ククチュ」とする(Rashid/Blochet, p. 234) また、プロシエの校訂本によったボイルの英譯では、譯者の考えを入れ、「モンケ・カアンとスベエテイ・バートルの子ククチュは右翼として10トマンの軍とともに」[出發した]とするが従わな。 (Rashid/Boyle, p. 225)
- (33) Rashid, 199a; Rashid/Blochet, p. 361. ちなみに「トマン」(tuman/tumen) は「モンゴル語で「萬」の意」。
- (34) 元、陳桎『通鑑續編』(至正二十一年刊本景照) 卷三三、開慶元年秋七月の條の註。
- (35) 王惲「中堂事記」(『秋潤先生大全文集』卷八一)、中統二年四月三十日の條に、王惲が「大理及び合刺章に宣諭して本土に還らしむるの詔」を起草させられたことが見える。(この詔は、同文集の卷六七、「翰林遺藁」にも收められている。) この時点で、王惲は開平府に居た。
- (36) 前掲杉山正明「クビライ政權と東方三王家」二九四〜二九五頁にウリヤンカダイ軍中の左翼諸王の存在とその意味についての考察がある。
- (37) 『宋史』卷四四、理宗本紀四、開慶元年（一二五九年）八月乙酉の條、「降人、大元憲宗皇帝の軍中に弱ずるを來言す。」同、卷四七四、賈似道傳、開慶元年十一月の條。
- (38) 『元史』卷一二、兀良合台傳、「時に世祖は已に江を渡り、鄂州に駐す。也里蒙古を遣わし、兵二千人を領して來援せしめ、且つ勞問を加う。遂に鄂州の潯黃州より北渡し、大軍と合す。」同、卷二二、鐵邁赤傳、「歲己未（一二五九年）、皇弟（クビライ）、兵を鄂渚に駐す。兀良哈台の廣西より長沙に至るを聞き、鐵邁赤を遣わし、練卒千人、鐵騎三千を將いて兀良哈台を岳州に迎えしむ。兀良哈台、援を得て江夏に抵り、北のかた黃州を涉る。」「先廟碑銘」では、クビライが派遣した人物を「曲里吉思 Kögis」、人數を千人とし

ている (3a)。

- (39) 宮崎市定「鄂州の役前後」(『アジア史研究』第一、一九五七、同朋舎、所収) 四〇二頁。前掲杉山正明「クビライ政權と東方三王家」二八六～二八八頁。

- (40) 前掲杉山正明「クビライ政權と東方三王家」二九五～二九六頁。

- (41) Rashid, 193b~194a, 199a~199b; Rashid/Blochet, p. 334, pp. 383~385.

- (42) 「先廟碑銘」の初めには、成宗テムルの元貞二年(一二九六年)正月のアジュへの贈諡のいきさつが記されている。アジュの子プリンギダイ(不憐吉歹)からの贈諡の要請をテムルに奏したのは、バートルの子ウダタイ(兀突歹)であった。

- (43) 『永樂大典』卷一九四一七所收、站『經世大典』站赤二の、至元八年十一月、是月九日の條、至元十三年正月十五日の條に、站赤を管轄する「諸站都統領使司」の官として「兀良哈解」の名が見られる。至元十三年の記事は、「諸站都統領使司」を「通政院」と改稱することについてのものだが、『元史』卷九、世祖本紀六、至元十三年正月壬申の條が對應し、ここでは、「兀良合帶」の名が見える。ウリヤンカダイの傳記資料類には、彼がジャムチを管轄した事を述べるものは無い。また、これらの記事が、ウリヤンカダイの没年以降のものであることから、別人と考えられる。

- (44) アジュの名稱等について述べる。『集史』部族考、ウリヤンカト部族の條では、「スベエタイ・バートル」には、

甥 (Baradar-zade) がつゝ、彼の名はアジュ (Aju) 「であ

る」]と記される (Rashid, 32a)。アジュをスベエタイの甥とするのは、このみである。部族考、バーリン部族の條でも (pisar-zade, 41a) 'クビライ・カアン紀でも (navāda, 210a) 'スベエタイの孫と記されている。アジュとウリヤンカダイの血縁關係には今後とも注意したい。なお、クビライ・カアン紀中には、Ajuと記されている箇所が二つある(いずれも、210a)。『集史』部族考のヘタグロフのロシア語譯、それによつた余大鈞の中國語譯で、アジュの名を「アジュ・カアン(阿朮汗)」とするのは、次の文の主語(クビライ)カアンを、文末にあるアジュの名に續けて讀んだための誤譯である。(Rashid/Xerapov, p. 160: 余大鈞他譯『史集』第一卷第一分冊(一九八三年、商務印書館)二六〇頁)

先にふれた *Shu'ab-i Panigina* (133a), *Mu'izz al-Ansāb* (53a) にも、アジュはクビライ・カアンのアミールの一人として名が擧げられているが、どちからでも「AWJW/Aju~Uju」と記されている。これは、「彼の名はアジュ[である]」(nami u aju) とある記述の二番目の alif が落ちて、「Uju」という名[である]」(nami u ju) と讀まれたため生じた形ではなからうか。

一方、マルコ・ポーロの『世界の記述』には、李璣の亂の記事があり、その鎮壓軍の (Baton) 二人の名が記されている。その一人は、前後の事情から、このアジュであると考えられる。『世界の記述』の最善本と言われる所謂 F 寫本に基

づいたベネデットの校訂本では、その名を Aguil と読むが、F 寫本では i の上の點が無く、Aguil の書寫の際の誤りと考えられる。また、諸寫本では、様々な綴りでこの名が記されているが、末尾の i のみは共通しており、原テキストから i があったと考えられる。アジュの本来の名は Ajul であつた可能性がある。(Marco Polo, 60a; Marco Polo/Benedetto, p.130; Pelliot, *Notes on Marco Polo*, 11. AGUL) 漢文史料にも、誤字の可能性はあるがこのアジュを「阿朮魯」と記したものがあつた(『新編羣書類要事林廣記』(元祿十二年和刻本) 壬集卷一「軍官館穀」(一〇葉表裏にかけて))。

(45) スベエティ家の根據地について述べる。河南での根據地は汴梁附近であるが、この他に二つの根據地があつたと考えられる。ひとつは、モンゴリアのトーラ河畔である。それは、『元史』速不台傳に、グユク即位の後、スベエティが「禿剌河上に還家す。」とあり、「先廟碑銘」にも、彼が「禿剌河上に卒す。」とある事より分かる。もうひとつは、現在のフフト東方の官山である。「先廟碑銘」にアジュを葬つた地を「大同宣寧縣」と記している(11a~12b) 事から判断される。大同宣寧縣そのものとスベエティ家とは、前後を通じて關係が無い。『金史』卷二四、地理志上、大同宣寧縣の條には、管内に官山がある事が述べられている。「先廟碑銘」に言う大同宣寧縣とは、その管内の官山を指していると考えられる。官山は、ウゲデイの金朝攻略時に、その夏營地であり、モンゴリアから漠地に入る際の駐屯地であつた。これら

三つの根據地は、モンゴル帝國の東方への發展に従つてできたものと言えよう。

(46) 『元史』卷二、太宗本紀、四年壬辰、「夏四月、居庸を出で、暑を官山に避く。」同、卷一一五、睿宗傳、壬辰、「四月、半渡より眞定に入り、中都を過り、北口を出で、官山に住夏す。」

(47) Muhammad Qazwini, *The Tarih-i-Jahan-Gusha of 'Ala'ud-Din 'Ala-Malik-i-Juwayni*, Part I (Leiden and London, 1916) p.211. J. A. Boyle, *The History of the World-Conqueror by 'Ala'ud-Din 'Ala-Malik-i-Juwayni*, vol. I, p.256. Rashid, 183b; Rashid/Bloch p.247. 集史の記述は「ジャワイニーに基く」。

(48) 『元朝秘史』卷九、第二〇九節(譯文は、村上正二『モンゴル秘史3』一九七六年、平凡社 六頁による)「クビライ、ジュルメ、ジェベ、スベエティ、卿ら、四つの狗どもを名指したる地にやり、ボオルチュ、ムカリ、ボロクル、チラウシ・バートル、これなる四つの駿馬どもをわが側に「侍らせ」て」おれば、合戦の日となろうとも、ジュルチェデイ、タイダル^{チンギス}の二人をして、ウルウト、マンガト^{チンギス}の「軍士」を(率いて)わが「馬」前に立たせておれば、すべて朕が心は安らぐのであつたぞ」ここで四つの駿馬(dörben kütüüd)はチンギス・ハンが「わが側に「侍らせて」」いるのに對し、四つの狗(dörben nogas)は「名指したる地にやり」とあつて、四つの狗の方が地位が低いと考えられる。またモンゴル人の各家畜に對する思想も背景にあろう。

[木鐸警臨將]

Rashid——Rashid al-Din, Faḍl-Allāh Hamadānī. *Jāmi' al-Tawārikh*, MS. Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Revan 1518.

Rashid/Али-заде——*Джәйми, ат-Таваړиҳ*, Том I, часть I, критический текст, Москва, 1965.

Rashid/Хетагров——*Рашид-ад-дин Сבורник летописей* том I, книга первая: Л. А. Хетагров, Москва-Ленинград, 1952.

Rashid/Blochet——*Djami el-T'awrikh, Histoire générale du monde par Faḍl Allāh Rashid ad-Din*, tome II, Leiden, London, 1911.

Rashid/Boyle——*The Successors of Genghis Khan*, tr. from the persian of Rashid al-Din by. J. A. Boyle. New York, 1971.

Shu'ab-i Panjgāna, MS. Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Ahmet 2937.

Mu'izz al-Ansāb fi Shajarat Salāṭin Moghul, MS. Bibliothèque nationale, Ancien fonds persan 67.

Marco Polo——Marco Polo, *Le divisament dou monde*, MS. Bibliothèque nationale, fr. II16.

Marco Polo/Benedetto——L. F. Benedetto, *Marco Polo, Il Millione*, Firenze, 1928.

Pelliot, P. *Notes on Marco Polo I*, Paris, 1959.

out of step due to disparities in the benefits that they derived from the old system of customs, were forced to accept the changes in maritime customs administration in China.

THE SÜBE'ETEI FAMILY AND THE ESTABLISHMENT OF QUBILAI'S POLITICAL POWER

TSUTSUMI Kazuaki

Based on Chinese and Persian language historical resources, this study discusses the activities of one of Činggis-qan's four dogs, dörben noqas, a scion of the Sübe'etei family, Uriangqadai, and his grandson, Aju, from the Möngke period of the Mongol Empire until the establishment of Qubilai's political power. Its conclusions are the following:

(1) Uriangqadai was the military commander of the kešig of Möngke. When Möngke ascended the throne, he played a major role.

(2) Uriangqadai directed the military expedition to Yunnan 雲南, and brought about its pacification.

(3) It was necessary that Qubilai, for the sake of establishing his political power, ally with Uriangqadai and his army. Also, Uriangqadai had no choice but to cooperate with Qubilai.

(4) After the establishment of Qubilai's political power, Aju became the *duyuanshuai* 都元帥, and commanded both the Mongolian and Chinese armies 蒙古, 漢軍 of Henan 河南. Thus the relationship between the Sübe'etei family and the Henan area is tracable back to Sübe'etei's times.